

眠る森のお姫さま

ペロー Perrault

楠山正雄訳

青空文庫

むかしむかし、王様とお妃がありました。おふたりは、こどものないことを、なにより悲しがっておいでになりました。それは、どんなに悲しがっていたでしょうか、とても口ではいいつくせないほどでした。そのために、世界じゅうの海という海を渡って、神様を願^{がん}をかけるやら、お寺に巡^{じゆん}礼^{れい}をするやらで、いろいろに信心^{しんじん}をささげてみましたが、みんな、それはむだでした。

でもそのうち、とうとう信心のまことがとどいて、お妃に、ひいさまの赤ちゃんが生まれました。それでさつそく、さかなな洗^{せん}礼^{れい}の式をあげることになって、お姫^{ひめ}さまの名づけ親になる教母^{きようぼ}には、国じゅうの妖女^{ようじよ}が、のこらず呼び出されました。その数は、みんなで七人でした。そのじぶんの妖女なかまのならわしにしたがい、七人の妖女は、めいめい、ひとつずつ、りっぱなおくりものを持って来るはずでした。ですから、生まれたときから、お姫さまには、もうこの世でのぞめるかぎりのことで、なにひとつ身にそなわらないものはなかったのでございます。

さて洗礼式がすんだあと、呼ばれた七人のなかま一同が、王様のお城にかえりますと、そこには、妖女たちのために、りっぱなごちそうのしたくが、できていました。ひとりひとりの食卓しょくたくの上には、お皿や杯さちかづきの食器しょつきがひとそろいならべてあつて、それは、大きな金の箱にはいつている、さじだの、ナイフだの、フォークだの、こののこらずが、ダイヤモンドとルビーをちりばめた、純金製じゆんきんせいのものでした。

ところで、みんなならんで食卓しょくたくについたとき、ふと見ると、いつどこからやって来たか、たいへん年をとった妖女がひとり、のそのそと広間にはいつて来ました。けれどこの妖女は、この席に呼ばれてはいなかったのです。

というわけは、このお婆あさんの妖女は、今から五十年もまえ、ある塔とうの中にこもったなり、すがたをかくしてしまつて、もういまでは、死んでしまっているか、魔法まほうにでもかけられて、なにかかわつたものにされてしまつた、とおもわれていたからです。

王様はあわてて、この妖女の前にも、ひとそろい食器を並べさせました。でも、それはもう、大きな金の箱に入れた純金製じゆんきんせいのものではありませんでした。なにしろお客は七人のはずでしたから、七人まえのしたくしか、できてはいなかったのです。するとお婆あさんの妖女は、じぶんだけが、けいべつされたようにおもつて、口の中で、なにかぶつぶ

つ、口ごごとをいっていました。

そのとき、ほかの若い妖女のひとりが、そばにとなりあわせていて、おばあさんのくどくどいうことばを、そつと聞いていました。それで、このおばあさんが、王女になにかよくないおくりものをしようと、たくらんでいることがわかりましたから、食事がすんで、みんなが食卓しよくたくから立ちあがると、そのまま、その妖女は、とぼりのかげにかくれていました。それは、こうしてかくれていて、そのおばあさんが、なにをたくらもうとも、じぶんがそのあとに出て、すぐ、そのろいのことばを、うち消すようなことをいって、それをお姫ひめさまへのおくりものにしよう、とおもったからです。

そうこうするうちに、いよいよ、妖女たちは、それぞれ、お姫さまにおくりもののことばをのべることになりました。なかで、いちばん若い妖女は、お姫さまが世界一美しい人になれますように、といいました。つぎの妖女は、天使のようなおこころがさずかりますように、といいました。三ばんめの妖女は、王女たちいふるまいの、やさしく、しとやかにありますように、といいました。四ばんめの妖女は、たれおよぶもののないダンスの上手じょうずになれますように、といいました。五ばんめの妖女は、小夜啼鳥さよなきどりのような、やさしい声でおうたいになりますように、といいました。六ばんめの妖女は、どんな楽器がっきに

も、名人^{めいじん}の名をおとりになりますように、といいました。いよいよおしまいに、おばあさんの妖女の番になりました。この妖女は、さもいまいましそうに首をふりながら、王女は、その手を糸車のつむにさされて、けがをして死ぬだろうよといいました。

このおそろしいおくりものは、身ぶるいの出るほど、みんなをびつくりさせて、たれもお姫さま^{ひめ}のために泣かないものはありませんでした。そのときです、若い妖女が、とぼりのかげから出て来て、とても大きな声で、つぎのようなことばをいいました。

「いいえ、王様、お妃様、だいじょうぶ、あなたがたのだいじなおひいさまは、いのちをおなくしになるようなことはありません。もつとも、わたくしには、この年よりのいったんかけたのろいを、のこらずときほごすまでの力はございません。おひいさまは、なるほど手のひらに、つむをおつきたてになるでしょう。けれどそのために、おかくれになるということはありません。ただ、ぐつすりと、ねこんでおしまいになって、それは百年のあいだ、目をおさましになることがないでしょう。そして、ちやうど百年めに、ある国の王子さまが来て、おひいさまの目をおさまし申すことになるでしょう。」

王様は、妖女ようじょのおばあさんのよげんしたさいなを、どうかしてよけたいとおもいました。そこで、その日さつそく、国じゆうにおふれをまわして、たれでも、糸車につむをつかうことはならぬ。家のうちに、一本のつむをしまっておくことすら、してはならぬ。それにそむいたものは死刑しけいにすると、きびしくおいわたしになりました。

さてそれから、十六年は、ぶじにすぎました。あるとき、王様とお妃様が、おそろいで、離宮りきゆうへ遊びにお出かけになりました。そのおるすに、ある日、若い王女は、お城の中をあちこちとかけあるいておいでになりました。するうち、下のへやから上のへやへと、かけあがつて行つて、とうとう塔とうのてつぺんの、ちいさなへやにはいりました。見ると、そこには、人のよさそうなおばあさんが、ひとりぼっちですわっていて、つむで糸をつむいでいました。このおばあさんは、つむを使つてはならないという、きびしい王様のおふれを、つい聞かなかつたものとみえます。

「おばあさん、そこでなにをしているの。」と、お姫さまはたずねました。

「ああ、かわいいいじょツちゃん、わたしや、糸をつむいでいるのだよ。」と、おばあさんはいいました。

このおばあさんは、王女がたれだか、すこしも知らないようでした。

「まあ。」と、王女はいいました。「なんてきれいなんでしょう。それはどういうふうにするものなの。あたしにかしてごらんないな。あたしにもできるかどうか、やってみていから。」

お姫さまは、こういつて、そのつむを、手にとりましたが、それは持ち方がいけなかったのか、たいへんあわてて、ぶきような持ち方をしたのか、それとも、あのわるい妖女ようじよののろいのことばが、いよいよしるしをあらわすときになったのか、とたん、つむは、いきなり王女の手にささって、王女はばったり、そこに倒たおれてしまいました。

人のいいおばあさんは、あわてて人を呼びました。みんな、お城のそこからもここからも、かけ出してきました。お姫さまの顔に水をそそぎかけたり、ひもといて着物をゆるめたり、手のひらをたたいてみたり、ハンガリア女王の水という薬で、こめかみをもんだり、いろいろにしてみても、王女は息をふきかえしませんでした。

さて、王様はこのさわぎを聞いて、さっそくかけつけておいでになりました。そうして十五年むかしの妖女ようじよのよげんを思い出しながら、やはりこうなるうんめいだったことをさとって、お姫さまを、そのまま、お城のなかでも、いちばん上等のへやにつれて行かせ、

金と銀のぬいとりをした、きれいなねだいの上にねかしました。

ねだいの上に、すやすや眠っておいになるお姫さまの、美しさといつてはありません。それはちいさな天使だといつてもいいくらいでした。人ごちがなくなつていても、生きているとおりの顔いろをしていて、ほおは、せきちく色をしていましたし、くちびるは、さんごをならべたようでした。目こそつぶつてはいますものの、かすかに息をする音は聞こえます。それで、王女が死んでいないということがわかったので、まわりについている人たちは、よろこんでいました。

王様はそこで、やがて人が来て、目をさませるまで、しずかにねかしておくようにと、きびしくおいつけになりました。

さて、王女を百年のあいだ眠らせることにして、やっと、あやういのちをとりとめた、あの心のいい妖女は、ちょうどこのさわぎの起こったとき、一万二千里^{まん}はなれた、マタカ^りン国に行つていましたが、その使っているこびとから、この知らせをすぐうけとりました。そのこびとは、『七里とびの長ぐつ』といつて、ひとまたぎに七里^りずつあるく長ぐつをはいて、かけて行つたのです。それで、妖女^{ようじよ}はさつそくそこを出て、竜^{りゅう}にひかせた火の車に乗ると、ちょうど一時間で、王様のお城につきました。

王様は、お手ずから、妖女を馬車から助けおろしました。妖女は、王様のなさったことを、すべてけつこうですといいました。でも、たいへん先のことのよく見える妖女でしたから、百年ののちに、お姫さまがせつかく目をさまして、この古いお城の中に、たったひとり、ぼつねんとしているのでは、どうしていいか、わからなくて、さぞお困りになるだろうと思いました。

そこで、なにをしたでしょうか。妖女は、魔法まほうの杖つえをふるって、王様とお妃をのぞいては、お城のなかの物のこらず、それはおつきの女教師おんなきょうしから、女官じよかんから、おそぼづきの女じよちゆう中から、宮内官くわない、表役人おもてやくにん、コック長りようりばん、料理番から、炊事係すいじがかり、台所ボーイ、番兵、おやといスイス兵、走り使いの小者こものまでのこらず、杖つえでさわりました。それから、おなじようにして、べつとうといつしよに、うまやでねている馬も、裏庭に遊んでいるむく犬も、お姫さまのねだいの上で眠っているお手飼がいの狆ちんまでも、みんな魔法の杖でさわりました。

魔法の杖でさわると、すぐ、たれもかれも、なにもかも、たわいもなく眠りこけてしまつて、お姫さまが目がさますまでは、けつして目をさましませんし、お姫さまに用事ができれば、いつでも目をさまして、御用をつとめるはずでした。なにもかも眠ってしまった

といって、それはかまどの前の焼きぐしまだが、きじや、やまどりの肉をくしにさしたまま、やはり眠ってしまいました。これだけのことが、みんな、ほんの目^まばたきひとつするまに、できあがつてしまいました。妖女^{ようじょ}というものは、まったくしごとの早いものですね。

さてそこで、王様とお妃とは、お姫さまのひたいに、そつと、やさしくほおずりして、お城から出て行きました。そうしておいて、たれもお城に近づくことはならないという、きびしいおふれを、また国じゆうにまわしました。

でも、そのおふれは、わざわざ出すまでもありませんでした。なぜというに、十五分とたたないうち、お城をとりまわしている園^{その}の中に、たくさんの高い木やひくい木が、もつさり^{しげ}と茂りだして、そのあいだには、いばらや草やぶが、びつしり鉄条網^{てつじょうもう}のようにからみついてしまいましたから、人間もけだものも、それをくぐってはいえることはできなかつたからです。

そういうわけで、しばらくすると、そこから見えるものは、お城の塔^{とう}のてっぺんだけになりました。それも、よほど遠くにはなれてでなければ、見えないのです。これも、妖女のみごとな、はなれわざだったことがわかりました。こうして、王女は眠っているあいだ、

たれひとりおもしろ半分、のぞきにくることもできないようになったのでございます。

三

さて、百年は夢ゆめのようにすぎました。そのじぶん、その国をおさめていた新しい王様の王子が、ある日、眠る森の近くを通りかかりました。

この王子は、眠っている王女の一族そくが、とうに死にたえて、そのあとに代って来たべつの王家の王子で、その日はちょうど、そのへんに狩かりに出かけて来たかえり道なのです。それで、遠くからお城の塔をみつけると、あの森の中にある塔はなんだといって、おそぼの者にききました。

みんなは、てんでん、じぶんの聞いているとおりをこたえました。

なかのひとりは、あれは、ゆうれいが出るといふひようばんの、古い荒城あれじろだいいました。

すると、またひとりが、あれはこの国の魔法使まほうつかいや、わるいみこたちが、夜会やかいをする場所だいいました。

そのなかで、わりあい、おおぜいのものいうところでは、あれは昔から人くい鬼の住んでいるお城で、ちいさなこどもをつかまえては、みんなあそこへさらって行って、それで、たれもあとからついてこれないように、あのとおり、じぶんだけ通って行ける森をこしらえて、その中でゆつくりたべるのだということでした。

王子は、このうちのどれを信じていいか、わからないので、まよっていますと、そのとき、ひとり、この土地に古くからいる年よりのお百姓しやうが、こういいました。

「王子さま、失礼しつれいではございますが、わたくしが五十年前、父から聞きました話では、

——その父はまた、もとは、じじいから聞いたのだと申しますが、——このお城の中には、それはそれは美しい王女のお姫ひめさまが住んでおりまして、もう百年のあいだ、ずっと眠りつづけたあと、ちょうど百年めに、ある王様の王子が来て、目をさましてくださるのを、待っているのだということでございます。」

若い王子は、この話を聞くと、からだじゅうに、かっとなついている血がもえあがるようにおもいました。ぜひとも、このめずらしいできごとのおさまりを、自分でつけてしまわなければとおもいました。美しいお姫さまをさずかるうえに、たれもはいれない魔法まほうのお城をきりひらく名譽めいよが、自分のものになるとおもうと、もううしろからからだを押される

ような気がして、さつそく、そのしごとにかかるうと決心けっしんしました。

そこで、王子は、森にむかつてずんずん進んでいきますと、大きな木も低い木も、草やぶもいばらも、みんな道をよけて通しました。その広い道をどこまでも行きますと、やがてその奥おくにあるお城に着きました。

ところで、すこしびつくりしたことには、ふとふりかえってみると、家来けらいに、ひとりもついてくるものがないのです。なぜというに、王子がはいるといっしよに、すぐ森の口がしまつてしまつたからです。けれども、王子はかまわずに、ずんずん進んでいきました。若いやさしい、そして火のようにあつい心をもつた王子は、いつも勇気のあるものです。

王子はやがて大きな広い庭に出ました。そこでまず見たものは、どんなこわいもの知らずでも、ぞつとして、骨までこおるようなものでした。なにもかも、気味きみのわるいほど、しいんとしずまりかえっていました。そこにも、ここにも、目に見えるものは、人間や動物が、みんな死んだもののように、ぐんにやり手足をなげ出しているすがたでした。けれども、そこに立っている、おやといスイス兵の鼻いきは、ぷんとお酒くさいし、ぽおつと赤いほほをしているのを見ても、この連中れんじゅうは、みんな眠っているのだということが、すぐ分かりました。しかも、その手にもつた茶わんには、まだぶどう酒しゅのしずくがのこつ

ているので、なかまとお酒^{さか}もりのさいちゆう、眠^なつてしまったのだということまで知^しれました。

王子はそれから、大理^{だいり}石^{せき}をしきつめた大ろうかを通^とつて、かいだんの上まで行^いつて、番兵のつめているへやにはいますと、番兵らは鉄^{てつ}砲^{ぽう}を肩^{かた}にのせてならんだまま、ありつたけの高いびきをかいてねていました。それからまた進^{しん}んで、いくつかのへやを通^とつて行^いきますと、どのへやにも、紳士^{しんし}たちや貴婦人^{きふじん}たちが、立^たつているものも、腰^{こし}をかけているものも、みんな、たわいなく眠^なりこけていました。とうとう、おしまいにはいったのは、のこらずが金^{かね}づくめのきららしいへやでした。そこに、りっぱなねだいがすえてあつて、四方のとぼりのこらず、あげた中に、それこそこの世にふたつとない美しいものがあらわれました。たぶん十五六くらいの年ごろのお姫^{ひめ}さまが、こうごうしく光^{ひかり}かがやくすがたで、眠^なつていたのです。あつと、おどろきながら、王子はふるえる足をふみしめふみしめ、その前にひざまづきました。

さあ、これ^{まほう}で魔法の力もいよいよつきたのでしょう、王女は、ふと目をさしました。そして、なんともいえないやさしい目で、じいっと王子のほうをながめました。

「王子さま、あなたでございましたの。」と、お姫さまはそういつて、につこりしました。

「ずいぶん待っていただきましたのね。」

王子は、このことばを聞くと、なんと行って、心のよろこびをいいあらわしていいか、分かりませんでした。王子は、じぶんのことよりも、どんなにかよけいに、お姫さまのことを、おもっているか知れないといいました。ふたりの話は、話すというよりも、泣いているといったほうがいいほど、ただもう、しどろもどろなものでした。ことばは、よどみがちでしたが、やさしい心のいずみは、かえって、いきおいよく流れ出しました。

それに、王子のほうは、きまりはわるいし、ただおどろいているばかりなのに、王女のほうは、なにしろ百年のあいだ、妖女ようじよがおもしろい夢ゆめを、それからそれと見とおしに見せていてくれたのですから、いくら話しても話しても、話のたねがつきるということがないのです。ですからふたりは、かれこれ四時間もぶつとおしに話しつづけていて、そのくせ話したいことの半分も話しきらずにいました。

そうこうするうち、お姫さまといっしょに、お城のそこでもここでも、みんなが目を見ました。たれもかれも、じぶんじぶんのしごとを思い出しました。ところで、みんなは、さしあたり、ほかに、くろうもくつたくもありませんでしたから、まっさきにおなかですいて、倒れたおそうにおもいました。女官頭がしちうは、ほかの人たちとおんなじに、ひどくおな

かがへって、がまんできないほどでしたから、だしぬけに大きな声で、お姫さま、お夕飯ゆうはんのおしたくができましたと、申しあげました。王子は、王女のお姫さまを助けて立ちあがらせました。お姫さまは、ずいぶんりっぱなふうをしていましたが、なにしろそれは百年まえにはやった、王子のひいおばあさんの着物とおなじようだということを、さすがにお姫さまにむかつていうことは、えんりよしていました。いくら流りゅう行こうおくれなふうはしていても、それがために、王女の美しさにも、かわいらしさにも、いつこう、かわりはなかったのですからね。

さて、ふたりは、鏡かがみの間まに出て行きました。そこで夕飯ゆうはんの食卓しょくたくについて、王女づきの女官じよかんたちがお給仕きゆうしに立ちました。そのあいだ、バイオリンだの、木笛きふえだのが、百年まえの古い曲きよくをかなでました。それは、百年まえの古い曲にちがいありませんでしたが、りっぱな音楽おんがくであることにかわりはありませんでした。

食事がすむと、時をうつさず、大僧正だいそうじょうは、ふたりをお城の礼拝堂れいはいどうへ案内あんないして、ご婚こん礼れいをすませました。女官頭がしちうは、ふたりのためにとばりをひきました。

四

ふたりはその晩、ほんのわずかししか眠りませんでした。王子は、あくる朝、王女にわかれて町へかえりました。おとうさまの王様が、待ちこがれておいでになるところへ、かえって行つたのでございます。

王子は、狩^{かり}をしているうち、森の中で道にまよつて、一軒^{けん}の炭焼小屋にとまつて、チーズや黒パンをたべさせてもらつたことなどを話しました。おとうさまの王様は、人のいい人でしたから、王子のいうことをほんとうになさいました。けれど、おかあさまのお妃は、もうさつそく、王子には、およめさんができていることを、おさとりになりました。

それから二年たちました。王女には、ふたりもこどもが生まれました。上の子は女の子で、これは「朝」という名でした。下の子は男の子でこれは「昼^{ひる}」という名でした。そのわけは、弟のほうが、ねえさんよりも、ずっとりっぱで、美しかったからでございます。

それからまた二年たつて、王様がおかくれになつて、王子が、新しい王様の位につくことになりました。そこではじめて、天下^{てんか}はれて、王女と結婚^{けっこん}のしだいを、国じゆうに知らせました。そうして、りっぱな儀式^{ぎしき}をととのえて、あらためて、眠る森から、お姫さまをお迎えになりました。王女はふたりのこどもを両わきにのせ、美しい行列の馬車をそろ

えて、王様のお城に乗りこみました。

美しいりっぱな、いい心をもったあいてを、待っているということは、むずかしいことです。でも、待つことによって、幸福はましこそすれ、へるということはありません。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

1950（昭和25）年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本では見出し「一」はページ上部に挿し絵があるため、他の見出しと字下げ分が異なっていました。統一しました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

眠る森のお姫さま

ペロー Perrault

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 楠山正雄訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>